

スマートライフ

危機のいま、渋沢栄一に学ぶ

「日本資本主義の父」重み増す言葉

強欲さが危機を招き、資本主義が試練に立たされる今、改めて輝きを放つのが渋沢栄一の91年の生涯だ。

資本主義には「欲望」以外の推進力があることを証明した。仁義道徳と利益の追求は必ず一緒になし得られるものなのだ。

逆境に陥った場合は 悪い点を改めるしかない

まず、写真を見てみよう。左と右下は栄一が1867年の洋行中に撮影したものが、ちょんまげ姿は、かつて攘夷思想にかぶれたサムライそのもの。しかし、この姿で欧州に乗り込んだ栄一は、実は好奇心の塊だった。初めて食する「カップヘー」(コーヒー)や「ブルという牛の乳を固めたもの」(バター)を「きわめて美味なり」と楽しみ、パリでは張り巡らされた下水道の中まで探索する熱中ぶり。かくして、わずか数カ月後にはちょんまげを切って、シルクハット姿に「変身」した。送られた写真を見て故郷の妻は「あさましき姿」と嘆いたという。

この好奇心、柔軟性こそが栄一の生涯を貫く柱。江戸から明治、大正、昭和と91歳まで生き抜いた秘訣でもありそう。そもそも栄一は農民の生まれ。生家は今の埼玉県深谷市の豪農だった。家業の農業やあい玉売りを手伝っていた栄一に、20歳を過ぎたころ転機が訪れる。江戸への遊学。儒学の塾や剣術道場に入出入りするうちに、はやりの攘夷倒幕思想に感化され、いわば勝

手に「武士化」していったらしい。

仲間と計って高崎城を乗っ取りクーデターを起こそうとするが、寸前に断念。それが契機になり人の仲介で、一橋慶喜の家臣の末に連なる。程なく慶喜は徳川幕府「最後の将軍」になるから、倒幕から一転、幕臣になるわけだ。そして慶喜の弟、徳川昭武がパリで開かれる万博に遣わされることになり、庶務係として攘夷論者のはずの栄一が海を渡ることになる。帰国後も大蔵省の官吏になるが、けんか別れして野に下ったのが大実業家として立つ出発点になったのだから、「災い転じて福とする」柔軟な底力がうかがえる。

後年、その著書「論語と算盤」で栄一は言っている。「人為的逆境に陥った場合は如何にすべきかというに、これは多く自動的なれば、何でも自分に省みて悪い点を改めるより外はない。

(中略)自分からこうしたい、あしたいと奮励さえすれば大概はその意のごとくになるものである」。幕末ほどではないが、既存の枠組みが揺れ動く今の時代にも、生きる言葉だ。



写真右上は1909年70歳当時。左上・右下は1867年フランスにて27歳(渋沢史料館提供)



上は持たないようにしていたという。栄一にとっての合本主義は、多くの知恵と資金を集める方策であって、資本で会社を「支配」する目的ではなかったのだ。

その点、三菱財閥創始者で5歳年上の岩崎弥太郎とは正反対で2人の緊張関係は歴史に有名な。「2人が手を握れば日本の実業界は思うまま。巨大な利益が上げられる」という岩崎の誘いを断りけんかをした、というエピソードが残る。「財なき財閥」、渋沢栄一の面目躍如だ。



仁義道徳と生産殖利 一緒になし得られるもの

世界金融危機を引き起こした、近年のグリード・キャピタリズム(強欲資本主義)——。栄一が見たら、何と言っただろうか?

約80年前に亡くなってはいるが、その答えの一端を本人の声で聞くことができる。東京都北区の飛鳥山公園。かつて栄一邸があった土地に建つ「渋沢史料館」に栄一の肉声を収めたレコードがあるのだ。少し長いが引用する。

「国を富ますには科学を進めて商工業の活動によらねばならぬ。商工業によるには、どうしても合本組織が必要である。合本組織をもって会社経営するには、完全にして強固なる道理によらねばならぬ。すでに道理によらずれば、その標準を何に帰するか。これは孔夫子の遺訓を奉じて論語によるの外はない。ゆえに、不肖ながら私は、論語をもって事業を経営してみよう。従来、論語を講ずる学者が仁義道徳と生産殖利とを別物にしたのは誤謬である。必ず一緒になし得られるものであ

る」
栄一と論語の出合いは6歳ごろ、父親の指導だったらしい。「私は農家に生まれたから教育も低かったが、幸いにも漢学を修めることができたのでこれにより一種の信仰を得たのである」と、後に語っている。論語は難解な教典などではなく、シンプルで実用主義的、日常生活に根ざしているのが特徴だ。栄一は大学などの高等教育とは無縁の91年の人生を論語を軸にして生き抜くことで、経済と道徳の融合を自ら体現して見せた。

商売だからもうけるが、その根底に道徳が必要で、富を社会に還元してこそ永続性が生まれる、というのが栄一の信念。「経営学の父」として著名なピーター・ドラッカーも、理想的な経営人として渋沢栄一の名を挙げている。自らの高額報酬への欲求を「資本主義」という言葉にすり替え、金融危機を引き起こした経営者やファンドは、栄一に学ぶ必要があったのだ。

合本主義は支配ではなく 知恵や資金集めるため

みずほフィナンシャルグループ、東洋紡、王子製紙、日本郵船、東京ガス、JR、サッポロビール……栄一が実質的に立ち上げた企業の数はおよそ500社。現存する大企業も多い。「日本資本主義の父」と呼ばれるゆえんだ。

鉄鋼業や鉄道など西欧の最新産業にじかに触れた、栄一。その繁栄の背後にある仕組みが「資本主義」というものだ。と現地の銀行家から教えられる。国や権威に頼らずとも、零細な資金でも、それを集めて環流させる仕組みがあれば、社会を潤し国を富ませる大きな力を生むらしい……。この「合本主義」(資本主義)こそが、維新後の弱小日本が力を結集して列強に追いつく源となり、ひいては今日まで続く日本経済繁栄の土台にもなったわけだ。

栄一は実際に銀行家の勧めに従って、会計係として管理していた持ち金を公債に投資し、帰国時には思わぬ利益まで上げて帰ったという。まさに資本主義の恩恵を得る成功体験。

1873年、日本初の銀行、第一国立銀行を創設する。みずほフィナンシャルグループの前身だ。「銀行」という言葉さえない時代。「ナショナル・バンク」という原名を適切に翻訳することが出来ず大いに困却した結果……「金行」とか「銀舗」とかその他種々の案もあったが何れも面白くないというので結局「銀行」にしようということになったのであった」と回想している。

立ち上げた数多くの会社で、自分の名前を付けた会社は「渋沢倉庫」などを除き、ほとんどない。資本も数%以

真に理財に長ずる人はよく集め、よく善用すべし

実業家として大成した栄一の関心は必然的に社会事業へと行き着く。医療や福祉、教育など、その生涯に携わった社会事業は600にも及ぶ。

例えば、その昔、行き倒れの老若男女や体の不自由な人を収容していた「養育院」を中心になって設立し、1876年から1931年に亡くなるまで、実に半世紀以上に渡り院長を務めた。現在はいくつかに分化した。その一つ東京都老人医療センターに栄一の銅像が残る。ちなみに栄一は二宮尊徳と並び、最も銅像の多い日本人の一人らしい。

ほかにも、日本赤十字社や東京慈恵会、聖路加国際病院などの立ち上げに尽力している。さらに教育にも熱心で、現在の一橋大学、東京経済大学、日本女子大学や東京女学館などの設立・運営に深くかかわった。東京証券取引所や東京商工会議所も栄一が奔走してとりまとめた組織だ。

母親譲りの「困った人を放っておけない性格」もあろうが、生半可な感傷や義務感ではここまで精力的に活動で

きないはず。それ以上に一本筋の通った思想があった。「論語と算盤」の「よく集め よく散ぜよ」という部分に栄一の信念を見ることができる。

「要するに、金は社会の力を表彰する要具であるから、これを貴ぶのは正当であるが、必要の場合によく費消するは、もちろん善いことであるが、よく集めよく散じて社会を活発にし、したがって経済界の進歩を促すのは、有為の人の心掛くべきことであって、真に理財に長ずる人は、よく集むると同時によく散ずるようではなからぬ。よく散ずるという意味は、正当に支出するのであって、すなわちこれを善用するのである」

資本をためて、大きな事業を進めるだけでなく、事業で上がった利益をため込まずに次に回してこそ、経済はさらに大きくなる、という「算盤」部分の真理と、そして、どうせお金を回すなら、より必要としている人に役立つように使うべしという「論語」部分の真理とが車の両輪となって回った人生だった。(山本由里)

孫の孫が語る「渋沢スピリット」

米国育ちで渋沢栄一についても詳しくなかった自分がご先祖を意識し始めたのは2001年ごろ。ヘッジファンドを退職し起業を考えていた時、生涯500社もの会社を立ち上げた栄一を深く知りたくなったのだ。

ところが、しょっぱなから「家訓」に「投機の業または道徳上いやしむべき務めに従事すべからず」とあるではないか。「いやしい」とは思わないが、それまで投資銀行やヘッジファンドで「安く買って、高く売る」ことを追求していたことは「投機」。自分にはなんとも、「不都合な真実」であった。それをきっかけに、栄一が実際の言葉で何と言っている、それは何を言わんとしたことなのか——を読み解く作業に興味が高まった。

自分のことで手いっぱいだった20~30代を過ぎ、子供が生まれ40代に入ったタイミングとも一致したのかもしれない。40代になると「何を残すか、残せるか？」に意識が向かう。栄一は他の財閥創始者と違い子孫にお金は全然残さなかったけれど、今の時代にも通用するたくさんの言葉を残してくれた。

しかも今日性がある。例えば「元氣振興の急務」(青淵百話)。「頃日来社会の上下一般に元氣が消沈して諸般の発達すべき事柄が著しく停滞し、来たやうである」と栄一が嘆いたのは大正の初期。「実業家は勿論、其の他一般国民は大きに元氣振興に力を用ひ、似て国運の発展に資せなければならむのであるが、近来の傾向は却てこれに反し、動もすれば政府万能主義を叫び、何事も政府に依頼せんとする風がある」と喝破する。

まるで今の「温室化」して、しかも温室の壁が破れ始めていることに気づきながら行動を起こさない日本社会への言葉のようではないか。「論語と算盤」ではサステナビリティ(持続可能性)を説く。ビジネスは目先の利益だけでなく30年後、50年後の社会に役立つような視点があってこそ長続きする。

栄一の言葉を追う中で、自分が取り組みたい事業の姿も明確になっていき、2008年にコモンズ投信を設立した。運用する「コモンズ30ファンド」では30年後も輝いているであろう日本企業、30社を厳選して投資する。実際に何年を意味するのか分からない「長期投資」に「30年」



渋沢健 コモンズ投信会長

しぶさわ・けん 1981年生まれ。渋沢栄一の孫の孫にあたる。父親の仕事の関係で小学2年から大学卒業まで米国で過ごす。MBA(経営学修士)取得後、JPモルガンやゴールドマン・サックスでマーケット業務にかかわる。97~2000年大手ヘッジファンド、ムーア・キャピタルの日本代表。01年に独立してシブサワ・アンド・カンパニーを設立、08年にコモンズ投信を設立して会長に。

行動を起こさないと日本社会にも警鐘

という具体的な数字を掲げることで目指すものが明確になる。

つまり30年投資とは、30年後のことを考える目線を持った投資のこと。30年間解約できないわけでも、30年後の値上がり株を「当てる」のでもない。今の自分だけでなく、将来の自分、子供や孫の生きる30年後を一緒に「つくる」ファンドなのだ。「30年後なんて自分はいない」などと思うなかれ。ファンドマネジャーの吉野永之助さん(米運用会社キャピタルの元日本代表)からして73歳。「投資」とは「お金をもうける手段」だけでなく次世代に「思いを遺伝させる手段」と考えてほしい。

1月19日で運用開始1周年を迎えた。この1年で賛同してくれる人が北海道から沖縄まで1174人いることが分かった。栄一は日本で初めての銀行をつくる時、「銀行は大きな河のようなものだ。銀行に集まってこない金は溝にたまっている水やボタボタ垂れている滴と変わらない」と言った。間接金融時代に銀行が果たした役割を現在の直接金融の時代に果たす可能性をもつのは、家計だ。

あわせれば1400兆円超の日本の家計は一人一人が、いわば「プチ資本家」。企業に性急なリターンを求めず、忍耐強い資本を供給する資本家だ。毎月3000円でも30年後の将来をつくるお金がボタボタ滴のように垂れ続けられれば、いつか必ず大河になる。このファンドは、その受け皿になるためにある。今こそ、目線を30年先に上げるべき時だ。

渋沢栄一の歩み

	このころ栄一は…	このころ日本は…
江戸	1840年 武蔵国血洗島村に生まれる	
	1853年 家業の畑作や藍間屋業の手伝い	黒船来航
	1863年 高崎城乗っ取り計画失敗、京都へ	
	1864年 一橋慶喜の家臣となる	
	1867年 1月 パリ万博随員として渡欧	大政奉還
明治	1868年 11月帰国	明治政府樹立
	1869年 明治政府の民部省に出仕	
	1870年 富岡製糸場の事務主任	
	1871年 大蔵省に出仕	廃藩置県
	1873年 大蔵省を辞め、第一国立銀行の総監役に抄紙会社(今の王子製紙)設立	地租改正条例公布
	1876年 東京府の養育院、瓦斯局事務長	
	1878年 東京商法会議所(今の東京商工会議所)会頭	
	1880年 足尾銅山に出資	
	1883年 大阪紡績会社(今の東洋紡)の発起人	鹿鳴館開館
	1884年 浅野セメントの経営を援助、日本鉄道会社(今のJR)理事委員	
	1887年 日本煉瓦製造会社創立、理事に帝国ホテル創立、発起人総代	
	1889年 東京石川島造船所(今のIHI)創立委員	大日本帝国憲法公布
	1893年 日本郵船取締役	
	1894年 札幌麦酒(今のサッポロビール)取締役会長	日清戦争勃発
	1897年 日本女子大学創立委員	
	1900年 日本興業銀行(今のみずほFG)設立委員、男爵に	
	1902年 欧米視察、ルーズベルト米大統領と会見	日英同盟
	1906年 東京電力会社創立・取締役	
	1907年 帝国劇場の取締役会長	
	1908年 中央慈善協会会長、第2回渡米	
大正	1914年 中国視察	第1次世界大戦はっ発
	1915年 第3回渡米	
	1916年 理化学研究所創立委員長	
	1921年 第4回渡米	
	1924年 東京女学館館長、日仏会館理事長	
	1926年 日本放送協会顧問	
昭和	1931年 日本女子大学校長	
	11月11日、91歳で永眠	満州事変